View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 48　25～36 (2010)]

島根県と鳥取県の県境周辺に見られる文末詞ヘンについて
－アンケートによる使用分布調査－

高橋　純　　伊藤沙季
(総合文化学科)　　(総合文化学科研究生)

On the sentence-final particle -*hen* used around the prefectural border between Shimane and Tottori

Jun Takahashi　　Saki Ito

キーワード：雲伯方言 Un-paku dialect　文末詞 sentence-final particle
終止形接続 conjunction with the dictionary-form　～ヘン-*hen*　～セン-*sen*

１．はじめに

本稿は、島根県と鳥取県の県境周辺で使用されている文末詞ヘンと鳥取県境港市周辺で用いられているヘンの変種と思われるセンの使用地域の確定と今後の研究の問題点の提起を目的としている。

この文末表現は、「今日、暑いヘン」や「これってかわいいセン」のように用いられている。この文末詞は、島根県と鳥取県の県境周辺出身の学生の間で、動詞や形容詞、形容動詞では終止形に接続し、名詞文にはダを介して使用されているのが確認されている。しかし、このヘン（セン）は室山（1998[2]）や神部（1998[2]）、今石（2004）、友定（2008）、日本放送協会（1981）、加藤（1935）などのいわゆる伝統方言を記述した研究には現れていない。新しく生成された新方言と位置づけられるだろう。[注1)]

文末詞としてのヘンの研究や調査としては、都染(2005）や間（2006)、田文（2007）があげられる。[注2)] そして、これらの調査・研究によって大まかな分布は示されている。しかし、都染（2005:12）の「島根県ではまだ確認されていない」としていることに関しては、事実にそぐわない。(間（2006)では、このヘンについて島根県安来市を中心にまとめている。私の日常の観察でも島根県内でも使用されていることは確認できている。）また、間（2006）では、島根県安来市・松江市・米子市の各地点で10名の調査にとどまっており、田文（2007）では鳥取県内に絞った調査と限定的なものとなっている。このように、明確な分布調査は行われておらず、また山陰地方(島根県・鳥取県)を網羅する形でも行われていない。

そこで、本稿では、アンケートをもとに山陰全域で調査を行い、文末詞としてのヘンの使用地域を確定することを目的とし、山陰の高等学校にご協力いただき、山陰地方(鳥取県鳥取市～島根県益田市)で若い世代に回答をお願いした。このような調査で、若い世代への定着度なども確認できるものと思われる。

まず２節でヘンの接続について簡単に触れ、３節で調査方法を、４節でアンケート調査をもとに細かな分布を考察する。そして、５節では簡単にヘンの出自について扱うことにする。

２．ヘンの使用について

ヘンの例を以下に上野（2005:59）よりあげる：

(1)　これ、かわいいへん？（これかわいいでしょう？）

(2)　どげやって行くだ？車だと誰か飲めん奴が出るへん？（どうやっていくの？車だと飲めない奴が出るんじゃない？）

(3)　海とつながっちょうへん？（海とつながっているよね？）

(4)　健ちゃん、さすがだへん？（健ちゃん、さすがじゃない？）

(5)　マジで？信じられんわぁ！　――　だへん？（本当に？信じられないよ！　――　だろ？）

上の例のようにヘンは文末に現れ、意味が共通語のヨネやジャナイなどの「同意表明・要求」や「確認要求」などの用法とほぼ重なる。[注3)] そして、終助詞ネ[注4)]のように文内や句末に現れることはなく、文末専用である。接続は、動詞や形容詞、形容動詞は、終止形で、名詞文の場合は断定の助動詞ダを介して承接する。他の終助詞と共に使用する例は観察されていない。

３．調査方法

調査は、択一式のアンケートによって行った。実施に際しては、A３用紙の表裏に印刷したものを用いた。主に対象は高校生としたが、本学（島根県立大学短期大学部松江キャンパス）の学生や教員、またゼミ生の学外の知り合いなどにもアンケートをお願いした。

高等学校に関しては、島根・鳥取の山陰両県の高校18校にご協力いただき、アンケートを実施していただいた。実施していただいた高等学校は以下の通りである(東から順に)：

- 鳥取県立鳥取商業高等学校
- 鳥取県立倉吉西高等学校
- 鳥取県立日野高等学校
- クラーク記念国際高等学校米子キャンパス
- 鳥取県立米子西高等学校
- 鳥取県立境高等学校
- 島根県立安来高等学校
- 松江市立女子高等学校
- 島根県立松江東高等学校
- 島根県立隠岐高等学校
- 島根県立松江南高等学校
- 島根県立松江商業高等学校
- 島根県立平田高等学校
- 島根県立出雲高等学校
- 島根県立飯南高等学校
- 島根県立横田高等学校
- 島根県立浜田高等学校
- 島根県立益田高等学校

東は鳥取県鳥取市から西は島根県益田市まで、鳥取県・島根県の山陰両県をほぼ網羅する形でアンケートを実施した。ただ、残念なことに現段階では、島根県中部（大田市付近）の調査が欠如している。

３.１　アンケートについて

本研究のアンケートは2008年度の島根県立大学短期大学部松江キャンパス総合文化学科の高橋ゼミ卒業プロジェクトにて行ったもの[注5)]に加えて、2009年に４校を加えたものである。そして、以下にこのアンケートの内容について略述しておく。

３.１.１　フェイスシートについて

フェイスシートは、次の「性別」「年齢」「居住地」「転居歴」の質問に答えていただく欄を用意した。文末詞についてはしばしば男女差も関係することがあるので、性別について質問させていただいた。年齢は、高校生を中心に調査を行うのでおおかた予想はできるが、実証という意味で年齢欄を設けた。[注6)]

本調査は、ヘンの分布に焦点を当てているので、居住地を記していただくことがアンケートの重要な部分となっている。しかし、昨今の市町村合併で単に市を書いていただくだけでは、その地域が判明しにくく、そのため詳しく書いていただきたいが、個人情報の面などから、あまり詳しすぎると書いていただけないことも多くなってきた。そこで、市とその中の町名、郡部の場合は町村名を記していただく

ことにし、そこまで書きたくない場合は、市・郡まで書いていただくようにした。そしてヘンの使用地域は比較的狭そうなので、他の地域から移住された場合には影響もあると考え、差し支えのない程度で転居歴も記入していただいた。

３.１.２　アンケート項目について

例文を作るにあたって、さまざまな接続となるように作例した。以下の通りである：

●形容詞

（例）今日暑いへん？（今日暑くない？）

●打消しの助動詞

（例）今日開いとらんへん？（今日開いてなくない？）

●「だ」：断定の助動詞「だ」

（例）明日休みだへん？（明日休みだよね）

●「た」：過去の助動詞「た」

（例）引き出しにあったへん？（引き出しにあるんじゃない？）

以下に挙げられる【　】括弧内の番号はアンケートの設問の番号に該当する。ヘンに関する設問番号は【２】【４】【10】【16】である。

これらの文をもとに、さらに類似した意味をもつ３種類の文末の表現の例を加え、アンケートの設問を作成した。

まず、鳥取県境港市を中心に用いられているヘンの変種と思われるセンの設問で、【５】、【６】、【７】、【８】がそれに当たる。

そして、松江市内で頻繁に耳にするガーも対象とした。【１】、【13】、【14】、【15】がガーを付した項目である。

また、共通語の設問を【３】、【９】、【11】、【12】に設けた。これによって、アンケートの設問文が受容可能なものであるかどうかを確認する。次にアンケートの設問を挙げておく：

【１】A　「今日も暑いがー？」
　　B　「だがー。」

【２】A　「今日暑いへん？」
　　B　「だがー。」

【３】A　「家のカギどこにあったっけー？」
　　B　「引き出しにあるんじゃない？」

【４】A　「ねえねえ、図書館行かん？」
　　B　「えっ、今日開いとらんへん？」

【５】A　「今日暑いせん？」
　　B　「だがー？」

【６】A　「家のカギどこにあったっけー？」
　　B　「引き出しにあったせん？」

【７】A　「明日休みだせん？何するだー」
　　B　「じゃあどっか行くかー。」

【８】A　「ねえねえ、図書館行かん？」
　　B　「えっ、今日開いとらんせん？」

【９】A　「今日暑くない？」
　　B　「そうだねー。」

【10】A　「明日休みだへん？なにするだー。」
　　B　「じゃあどっか行くかー。」

【11】A　「ねえねえ、図書館行かない？」
　　B　「えっ、今日開いてなくない？」

【12】A　「明日休みだよね？何しよっかー。」
　　B　「じゃあどっか行くかー。」

【13】A　「今日の朝ドラ見た？」
　　B　「見た見た、あんな方言使わんがー。」

【14】A　「今日のテスト全然わからんかったがー。」
　　B　「だがー。」

【15】A　「明日休みだがー？何すーだー。」
　　B　「じゃあ、どっか行くかー」

【16】A　「家のカギどこにあったっけー？」
　　B　「引き出しにあったへん？」

以上のアンケート項目に対して、４つの回答項目を設けた[注7)]：「①自分でもよく使う」「②聞いたことがあるけれど自分では使わない」「③聞いたことがあるけれど違和感がある」「④聞いたこともないし違和感がある」。

４．アンケート調査の結果考察

この節では、アンケートの結果を示し、その結果を考察する。最初に、ヘンの使用地域について見て、続いてセンの使用地域について考察する。

アンケートの回答数は1876件で、そのうち本研究に関係のある山陰両県（鳥取県・島根県）在住者の数が1836件である。そこから明確な住所・年齢等が記載されていないものを除き、1649件を有効な回答として分析対象とした。この有効回答の中には、他地域から引っ越してきた人も含まれている。有効回答率は、87.9%（小数点以下第２位を四捨五入）であった。以下は、有効回答のアンケートの内訳である：

- 平均年齢17.4歳(各調査時の年齢)
- 男688名・女961名
- 島根県居住者1231名・鳥取県居住者418名
- 本学学生53名・高校生1488名・その他108名
- 調査期間：2008年10月～2009年10月

４.１　ヘンについて

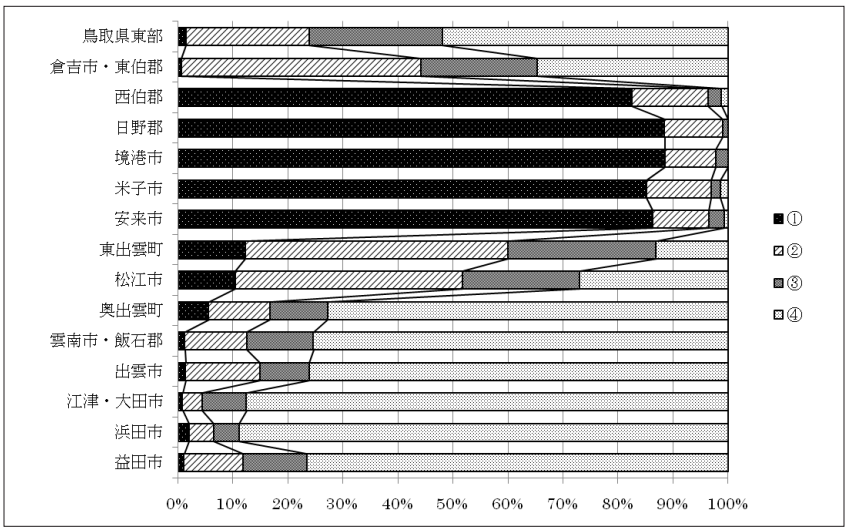
本節では、文末詞ヘンを対象として考察するので、アンケートの設問は【２】【４】【10】【16】が関連項目であり、これらの設問の回答について集計を行う。まず、ヘンの使用地域を見るためにアンケートの先の４つの設問の回答項目を合計したものを表１と図１に示す。つまり（【２】の①に答えた数＋【４】の①に答えた数＋【10】の①に答えた数＋【16】の①に答えた数）の合計を計算した。②～④においても同様である。

表1　ヘンの設問の回答合計

	①	②	③	④
益田市	3	28	30	199
	1.2%	10.8%	11.5%	76.5%
浜田市	5	11	11	215
	2.1%	4.5%	4.5%	88.8%
江津・大田市	1	4	9	98
	0.9%	3.6%	8.0%	87.5%
出雲市	9	86	57	483
	1.4%	13.5%	9.0%	76.1%
雲南市・飯石郡	6	51	55	342
	1.3%	11.2%	12.1%	75.3%
奥出雲町	26	51	48	334
	5.7%	11.1%	10.5%	72.8%
松江市	159	626	323	410
	10.5%	41.2%	21.3%	27.0%
東出雲町	16	62	35	17
	12.3%	47.7%	26.9%	13.1%
安来市	618	73	20	5
	86.3%	10.2%	2.8%	0.7%
米子市	501	69	10	8
	85.2%	11.7%	1.7%	1.4%
境港市	163	17	4	0
	88.6%	9.2%	2.2%	0.0%
日野郡	190	23	2	0
	88.4%	10.7%	0.9%	0.0%
西伯郡	208	35	6	3
	82.5%	13.9%	2.4%	1.2%
倉吉市・東伯郡	1	68	33	54
	0.6%	43.6%	21.2%	34.6%
鳥取県東部	4	60	65	139
	1.5%	22.4%	24.3%	51.9%

表とグラフの①～④は、「①自分でもよく使う」「②聞いたことがあるけれど自分では使わない」「③聞いたことがあるけれど違和感がある」「④聞いたこともないし違和感がある」に相当する。このグラ

図１　ヘンの設問の回答合計



フからわかるとおり、鳥取県西伯郡がヘンの東の境界で、西は安来市ということが見て取れる。

ちなみに、ヘンを使用する地域に絞り、各設問に対してどの回答項目に回答しているのかの細目を表２「地域別・設問別の回答数」に表した。設問【２】【４】【10】【16】のどの設問に対しても均等に回答されている様子がうかがえる。

図１のグラフから考えると、ヘンの使用地域の西の境界は、東出雲町と安来市の間である。しかし、松江市や東出雲町でも10%以上の①への回答がある。この点に関して詳しく見てみると、東出雲町では、各設問で①に回答した方は、だいたい安来高校の生徒で安来市と深い関わりがある。そして、松江市では、美保関町在住者が①に回答を多くしていた。まず、美保関以外の松江市が7.8%しか①を回答していなかったのに対して、松江市美保関町では54%が①を回答しており、①への回答の割合を押し上げている。この美保関町は、地理的に境水道大橋を渡るとすぐに境港市に抜けることができ、行政区的には松江市ではあるが、松江市街地へ行くよりも境港市や米子市に出かける方が便利な地域である。そして、この美保関町では、②の「聞いたことはあるが、自分は使用しない」という回答が50%近くに達している。このような状況から、ヘン使用の西の境界は、東出雲町と安来市の間であるとしていいだろう。

表２　地域別・設問別の回答数（ヘン）

	回答項目	設問2	設問4	設問10	設問16
安来市	①	161	146	157	154
	②	15	20	18	20
	③	3	12	3	2
	④	0	1	1	3
米子市	①	126	115	130	130
	②	18	25	13	13
	③	2	6	1	1
	④	2	2	2	2
境港市	①	42	40	39	42
	②	4	2	7	4
	③	0	4	0	0
	④	0	0	0	0
日野郡	①	49	49	48	44
	②	5	4	6	8
	③	0	1	0	1
	④	0	0	0	0
西伯郡	①	47	52	53	56
	②	13	9	8	5
	③	2	2	1	1
	④	1	0	1	1
合　計	①	460	433	454	450
	②	52	55	57	57
	③	8	31	7	6
	④	1	2	3	7

では、ヘン使用の東の境界はどこであろうか。こちらは、西の境界以上に東伯郡と西伯郡との間に明確な差が現れた。しかし、ここで注目に値するのは、東伯郡と西伯郡とでは通学している高校が重ならないということである。今回のアンケートをもとにすると東伯郡はほとんど倉吉西高校で、西伯郡は米子西高校と日野高校であった。現在、鳥取県では、普通高校の学区も廃止され、県内の高校はどこへでも行けるようであるが[注8)]、実際は、従来の学区と同様に、倉吉西高校には、倉吉市及び東伯郡の生徒が、米子市、境港市、西伯郡及び日野郡の生徒は米子市内の高校へ通っているようである。つまり、だいたい旧学区の境目が、ヘン使用の境界と一致しているように思われる。しかし、東伯郡と倉吉市は、西伯郡との隣接地域でもあり、②への回答が40%代にまで達している。

ちなみに、鳥取県の公立高校は、西部は米子市内、中部は倉吉市内、東部は鳥取市内に大きく三分割されるように分布しており、各地域の中間地点にはほとんど公立高校はないようである。

このように見てくると、高校生へのアンケートをもとにしているにせよ、ヘンの使用地域は高校の学区と強く結びついている可能性もあると思われる。確かに、若者の間で生まれた用法であると仮定するならば、若者の交流の場の多くは学校であり、その中ではフランクな会話も交わされ、かつ言語習得的にもまだ柔軟なところも残っている世代であるため、とても興味深い結果ではある。しかし、安来市と米子市においては、アンケート上、県境を超えて通学している例はなく、単に学区をその境界線とするのは性急に過ぎるようである。ちなみに、安来市民の生活エリアは、同じ島根県の松江市というより米子市が中心であるようだ。事実、安来市内を走っている広域生活バス（イエローバス）は、旧伯太町・旧広瀬町を回るのはもちろんであるが、米子市への路線を用意している。[注9)]

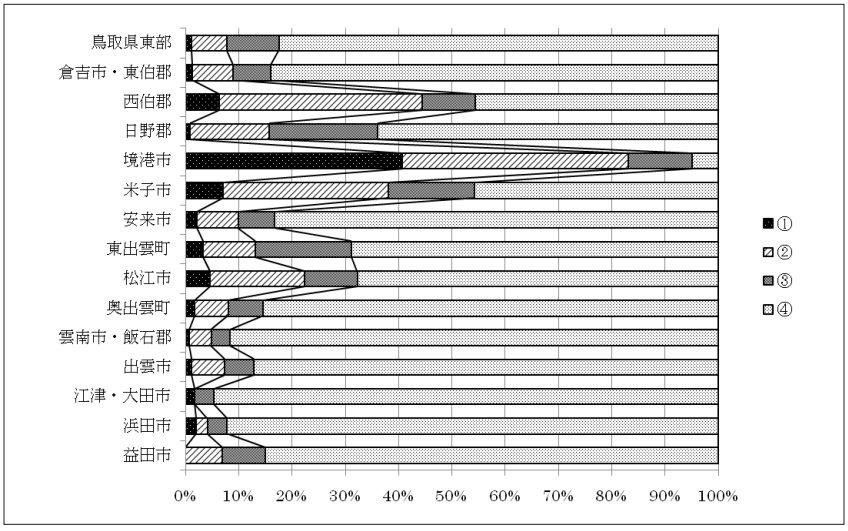
ちなみに、安来市から西伯郡内に限定するが、男女のアンケートの回答結果は、以下のとおりである。

表３　ヘン使用の男女差

		設問２	設問４	設問10	設問16
①	女	94.3%	90.9%	95.4%	95.1%
	男	77.9%	71.7%	78.3%	78.7%
②	女	4.5%	6.4%	3.8%	4.6%
	男	19.0%	19.0%	18.6%	16.9%
③	女	0.8%	2.6%	0.4%	0.0%
	男	2.2%	8.0%	1.8%	2.2%
④	女	0.4%	0.0%	0.4%	0.4%
	男	0.9%	1.3%	1.3%	2.2%

若干、女性の方が積極的に使用しているような印象を与えるが、作例を行った者が女性であり、かつ違和感の有無で質問をしたため、何に対して違和感を感じたのかについて判断が難しい。今回のアンケー

図2　センの設問に対する回答数



トだけで結論を出すことは避けるべきであると思われる。しかし、男女ともかなり日常的に使用している様子がうかがわれる。

４.２　センについて

ここでは、ヘンのバリエーションとして考えられるセンの使用地域を見ていく。ヘンと同様の集計方法で、設問【５】【６】【７】【８】のそれぞれの回答項目への回答数の合計を表４と図２に示した。

図２のグラフから、センはほぼ境港市のみで使用されていることがうかがえる。西伯郡で、①への回答が6.3%あったが、サンプル数が61名と少ないため４～５名が一つの設問において①を選択するとこの程度の割合まで上がってしまう。ヘンと同様に、西伯郡から安来市まででではあるが、回答項目別に集計したものを表５に表す。

また、米子市は隣接地域ということで、②の数が高いように思われるが、米子市在住者の回答者148名のうち36名が境高校（境港市）の生徒である。米子市在住者の境高校の生徒の回答とその他の回答を比較すると、表６のようになる。

表６を見ると、①の回答者である使用者は、境高校の生徒とその他の方では同じ程度であり、境港市の高校へ通っているからといって、センを使うようになる訳ではなさそうである。ちなみに、米子市在住の境高校通学者の平均年齢は17.3歳で、境港市に通学するようになってそれなりの時間は経過していることがわかる。

次に②を選択した数に着目すると、境高校の生徒が50%超であるのに対して、その他は20%前後である。そして④を見ると、境高校は20%よりも低い水準であるのに対して、その他は50%超である。

つまり、このように見ていくと、隣接地域である米子市であっても、あまりセンは認識されていないことがうかがえる。つまり、センはほぼ境港市内のみで使用されていると考えられる。

ちなみに、ヘンでも言及した松江市美保関町でのセンについての回答結果を見ると、表７のようになる。ちなみに、本アンケートにおいて、美保関町の在住者の中に境港市の高校へ通っている方はいない。

表４　センの設問の回答合計

	①	②	③	④
益田市	0	18	21	221
	0.0%	6.9%	8.1%	85.0%
浜田市	5	5	9	224
	2.1%	2.1%	3.7%	92.2%
江津・大田市	2	0	4	106
	1.8%	0.0%	3.6%	94.6%
出雲市	7	40	35	553
	1.1%	6.3%	5.5%	87.1%
雲南市・飯石郡	3	19	16	416
	0.7%	4.2%	3.5%	91.6%
奥出雲町	8	29	30	392
	1.7%	6.3%	6.5%	85.4%
松江市	70	270	150	1029
	4.6%	17.8%	9.9%	67.7%
東出雲町	4	12	22	84
	3.3%	9.8%	18.0%	68.9%
安来市	16	55	49	596
	2.2%	7.7%	6.8%	83.2%
米子市	42	183	96	270
	7.1%	31.0%	16.2%	45.7%
境港市	75	78	22	9
	40.8%	42.4%	12.0%	4.9%
日野郡	2	32	44	138
	0.9%	14.8%	20.4%	63.9%
西伯郡	16	96	25	115
	6.3%	38.1%	9.9%	45.6%
倉吉市・東伯郡	2	12	11	131
	1.3%	7.7%	7.1%	84.0%
鳥取県東部	3	18	26	221
	1.1%	6.7%	9.7%	82.5%

美保関町の回答者は、松江市内の高校生かもしくは町内の施設で働いている方である。割合で示すとかなりの率で使用されているように思われる。ただ、美保関町在住者のサンプル数が少ないので正確なこ

表５　地域別・設問別の回答数（セン）

	回答項目	設問5	設問6	設問7	設問8
安来市	①	3	5	5	3
	②	15	12	13	15
	③	14	13	9	13
	④	147	149	152	148
米子市	①	11	12	11	8
	②	49	45	44	45
	③	24	24	25	23
	④	64	67	68	71
境港市	①	19	21	18	17
	②	22	18	20	18
	③	3	6	5	8
	④	2	1	3	3
日野郡	①	1	0	1	0
	②	8	7	7	10
	③	11	12	10	11
	④	34	35	36	33
西伯郡	①	4	3	4	5
	②	21	25	23	27
	③	7	5	7	6
	④	31	30	29	25
合　計	①	38	41	39	33
	②	115	107	107	115
	③	59	60	56	61
	④	278	282	288	280

表６　米子市在住者のセン

		設問5	設問6	設問7	設問8
①	境高校	5.6%	8.3%	8.3%	5.6%
	その他	8.0%	8.0%	7.1%	5.4%
②	境高校	55.6%	55.6%	55.6%	58.3%
	その他	25.9%	22.3%	21.4%	21.6%
③	境高校	22.2%	19.4%	19.4%	22.2%
	その他	14.3%	15.2%	16.1%	13.5%
④	境高校	16.7%	16.7%	16.7%	13.9%
	その他	51.8%	54.5%	55.4%	59.5%

とは言えない。美保関町在住者の実際の数字を表8に示しておく。

以上、ヘンの使用地域は、主に東は鳥取県西伯郡から西は島根県安来市までであり、安来市に隣接している地域では、その認知度は高いものの実際使用している人は多くない。また、鳥取県の東伯郡でも、ヘンの認知度はそれなりに高いものの使用者はほとんどいないことが見て取れた。

センに関しては、隣接地域である米子市でもあまり認識されておらず、ほぼ境港市内のみで使用されていると考えられるが、松江市美保関町では、使用者もそれなりにいる可能性がうかがわれる調査内容となった。

５．ヘンの出自について

ここでは、ヘンの出自について言及するが、従来の研究を概観し、その疑問点を挙げるにとどめるつもりである。

５．１　伝統方言に記述されたヘン

ヘンという形式を、従来行われたいわゆる伝統方言の調査・研究より探すと、文末詞としてのヘンは現れない。以下に、伝統方言の記述を日本放送協会(1981)の資料より抜粋して、以下にあげる：

●鳥取県倉吉市国分寺

(6)ニュー　イナッテル　モンガナ　イマゴロニャニ　ニワ　サキー　キキャセンジャケーナー…(荷をになっている人がね、今頃のようには、荷は先へ来やしませんからね：27)

(7)イマ　イッピキモ　オリャーセン（今は一匹もいやしない：32)

(8)マットッタッテ　クリャヘンガナ（待っていたって来やしないんだよ：33)

(9)タマゴガ　アリャー　シェンカエー（タマゴがありはしないかね：39)

●大原郡大東町

(10)ワカーマヘン　コンダ　アチノ　イー　コタワカーヘンケン、(わかりませんと、こんどはあちらの言うことはわからないから：54)

(11)カタヤナエ　シェナヤナエ　カケラセン（肩や背（には）かけはしない：60)

(12)ナンカ　ホシーモンガ　アラヘンカ（何か欲しいものがないか：70)

●那賀郡雲城村

表７　美保関町在住者のセン(割合)

		設問5	設問6	設問7	設問8
①	美保関町	54.5%	54.5%	36.4%	22.7%
	松江(他)	2.0%	2.2%	1.4%	3.6%
②	美保関町	31.8%	27.3%	36.4%	40.9%
	松江(他)	18.4%	16.5%	14.8%	17.4%
③	美保関町	4.5%	9.1%	9.1%	13.6%
	松江(他)	10.3%	9.5%	7.5%	12.3%
④	美保関町	9.1%	9.1%	18.2%	22.7%
	松江(他)	69.3%	71.8%	76.3%	66.7%

表８　美保関町在住者のセン(人数)

	設問5	設問6	設問7	設問8
①	12	12	8	5
②	7	6	8	9
③	1	2	2	3
④	2	2	4	5

(13)サター　アッテモ　イカリャー　センケー
(通知があってもいかれはしないから：77)

(14)アガーナ　ジセツァー　ハー　イマカラ　キヤセンケーナー（あんな時節はもう今後、来はしないからねえ：85)

上記のような表現は、室山（1998[2]:196）では、「夜見新田方言では、(中略)　強い否定として、「書キャ(ー)ヘン(セン)」のように、「～シェン・ヘン」が用いられる」とあり、また神部（1998[2]:231）でも、隠岐島前の強調の否認形式として、「～サッタ」(キョーワ　エケサッタ。：今日は行きはしなかった）の説明の箇所で、出雲東部でも「オレ　ヘン。」(居はしない）のような表現があることを紹介している。また、石見でも「アルキャー　セン。」などのような表現が聞かれることを書いている。このヘンやシェン、センを伴った否定は、強調であるとされている。そして、この表現は、東は鳥取県の東伯地域から隠岐を含み、西は石見地方までと、広い範囲で確認される形式である。

また、このような「動詞連用形＋ハ＋シナイ」に由来する形式以外に、ヘンやシェン、センが現れるのは、共通語の丁寧語の否定マセンに相当する形式で、「オマーヘンナー（いませんね)」「ゴダエヘンガネ（いらっしゃいませんね)」「ワカーマヘンダワーネ（わかりませんね)」などである。ちなみにこの丁寧形の例はすべて島根県大原郡大東町の資料から取ったものであるが、倉吉市(東伯)でも雲城村（石見）の資料でも同様の例は見られた。

このような例から、いわゆる山陰地方の伝統方言において、ヘンという形式を用いた否定表現は広い範囲に存在していたことが確認できる。しかし、終止形に接続する文末詞としてのヘンを見つけることはできなかった。では、どのようにして文末詞のヘンは発生したのであろうか。今のところ、関西方言の受容という観点と、この節で示した伝統方言の否定の強調表現のヘンから派生したという観点の２つの立場がある。以下にその概略を示し、最後に厳密な考察ではないが、本稿の立場も書き加えることにする。

５．２　関西方言の受容

文末表現ヘンの出現を、上野（2005）や田文(2007）では、関西方言を受容したことで説明しようとしている。たとえば、上野（2005）は、厳密な考察をしている訳ではないが、「この地域の否定は「ん」であり、近畿地方からさほど遠くないことを考慮するなら、関西式の否定「へん」が入ってきて共通語形「～ではない」の「ない」に置き換わり、若者たちに支持されるようになった「新方言」〈井上史雄〉」の可能性を示唆している。また、田文(2007）でも、米子市の社会的な変遷に着目して、関西方言のヘンの影響を考えている。

更に語形にまで言及した詳しい考察として都染(2005）がある。都染（2005）では、関西方言の「明日は月曜日やない？」という表現を引き合いに出し、雲伯方言内の断定はダであることを考慮し、上記の表現のヤにダを入れて、関西的な打ち消し「ヘン」を後接させると、「明日は月曜日ダヘン？」となるとしながら、以下のような考察を加えている：

「～（ダ）ヘン」は、４－１－２（ママ）で述べたように。

「だ＋ない（ねー)」＞「だ＋へん」

という過程を経て生まれたものではなかろうか。ただし、上に記したように、打ち消し部分が

「へん」に変わるとともに、従来みられた「だ」の用言終止形への接続はなくなり、共通語と同じような（共通語で「だ」を用いることのできる場合のみに「だ」を介する）用法に変化しているようである。[注10)]

しかし、関西方言の否定辞のヘンの受容により、米子市周辺の文末詞ヘンができたのなら、先に記した伝統方言的な、むしろ関西方言に近い用い方をなぜあえて変えなければならなかったのかが説明できない。また、本稿４節で見たように境港市では文末詞センという形式が用いられている。センの用法は、先のアンケート調査でもわかるとおり、ほとんどヘンと同様である。つまり、ヘンが受容された後、センの形が現れたということになるのだろうか。サ行とハ行の交替ということを考えた際、再度、若い世代の中でサ行へと変わったと考えるべきなのだろうか。先に挙げた伝統方言の例では、セン・ヘンの両形式とも現れているにも関わらずである。このようなことを考えると、確かに、あこがれの地としての関西地方の影響はあるにしても、論の展開の始めに、関西方言の受容を考えることは避けるべきであると思われる。

５．２　伝統的な否定辞からの派生

間（2006）では、「もともとは打ち消しの助動詞「ヘン」からきていると考えられる」と指摘している。まず、伝統方言のヘノ・ヘンから論を展開している。例えば「ソトニワ　アーヘンカヤ？」や「ダイク　シチョーヘン？」のアーやチョーは、ｒ音の脱落現象により長呼されており、ここは本来、未然形のraがあり、アラヘン・シチョラヘンであったが、若者はこの長呼部分を終止形と認識して、終止形接続ができあがったとしている。この説は、使用地域出身者らしい直感に基づいた示唆に富んだものである。

しかし、ｒ音の脱落部分の長呼部分が元来未然形であるとするのは、あまりにも自説に引きつけすぎた考えた方であると思われる。たとえば、間（2006）の例文に出てくる「マケーヘノ・マケーヘン」の長音部分まで未然形であると考えるのは無理がある。「マケーヘン・デキーヘンデ・セーヘノワイ」ならば、引き音を介さずにそのまま未然形と同音なのでヘン・ヘノを接続できるはずである。このようなことを鑑みると、単にｒ音脱落による長呼部分の未然形を終止形と誤認して、終止形接続の文末詞ヘンが派生したと考えるのは性急であると思われる。

しかし、本稿では、基本的に間（2006）の伝統方言の否定辞ヘンからの派生という説を支持したい。厳密な考察ではないが、このヘンを用いた否定は、副助詞「ハ」を介した「連用形＋ハ＋シナイ」の形とする。そして、室山（1998[2]：19）で指摘している「「ステリャーシェン・ステリャーヘン」のように拗長音になるものは高年層が多用し、「ステラーヘン・クラーヘン・クラヘン」のように直音化したものは、中年層以下の表現活動に現れがちである」という事実より、「連用形＋ハ」の部分は拗長音を経て直音化した長音となったと考えられる。間（2006）が挙げていた「マケーヘノ・マケーヘン・デキーヘンデ」などは、この名残であると思われる。そして、ヘンやセンの意識として、都染（2005）に引用されている廣戸（1949）の「使用者はカカンもカカセンもジャジャセンも共に「書かない」と同一のものとして表現しているのである。決してカカンは書かないの意で、カキャセンは「書きはしない」から出たものであるとは感じて居らない」という言語意識から、「セーヘン」のように未然形の長音が現れるのだろう。[注11)] つまり、伝統方言的な用法の中にも、このような「連用形＋ハ＋シナイ」形の「連用形＋ハ」の部分の直長音と未然形接続とが混在していると考えられる。

そして、ヘンが単なる否定であると感じられるようになっても、長音部分が残っている場合は、モーラ的な意識からその箇所に何かしらの語尾が入ると感じられるようになったのだろう。

まだ、何の実証的なデータもないが、例えば、「ア■ヘン」や「シチョ■ヘン」「マケ■ヘン」、「デキ■ヘン」などすべての■に共通に入りうるものはルだけである。また、「ステラーヘン」のようなものも、雲伯方言の「ミラン（見ない）」や「デキラ

ン（できない）」などの一段動詞の五段化という事実を考えると「ステラ■ヘン」の■の部分には、否定の助動詞ンが入ることになり、現在の文末詞のヘンと同様の形が作られる。今後は、この点に関して、更に世代を広げて調査を行っていかなければならないだろう。

しかし、文末詞ヘンの発生がどのように説明されようとも、なぜこの文末表現のヘンは島根県安来市から鳥取県西伯郡という狭い地域だけに発生したのかは説明できない。このことに関しては、更に詳しい調査・分析が必要であろう。

６．まとめ

本稿では、鳥取県鳥取市から島根県益田市まで、高等学校の協力を得てアンケート調査を行い、文末詞のヘンが鳥取県の西伯郡から島根県安来市までの範囲に限定されて使用されていることが明らかになった。そして、ヘンのバリエーションとして考えられるセンの使用は、ほぼ境港市内に限定され、近隣地域でさえ境港市と関係のない人には認識されていないことがわかった。

今後の課題として、ヘンの出自について、関西方言の受容にしても、伝統方言からの派生にしても、なぜこの用法がこの狭い地域でのみ用いられているのかということを考慮して、議論を進めていかなければならないだろう。言語接触の観点や新たな住民の流入などさまざまな社会条件も加味しながら、更に広い世代に対しての調査を行っていくつもりである。

最後になってしまったが、アンケートにご協力いただいた方々、高等学校の皆様に心より感謝申し上げたい。

注

１）　「新方言」とは、井上史雄氏が定義しており、「若い世代に向けて増えている」「標準語・共通語と語形が一致しない」「地元でも方言扱いされている」の３つの条件にあうものである。井上・鑓水（2002：104f.）

２）　ヘンについて軽く言及しているものとしては、上野（2006：58f.）がある。

３）　文末詞ヘンの意味の詳しい分析は、稿を改めて論じることとする。本稿においては大まかな分類でお許し願いたい。

４）　品詞については、とりあえず、間投詞と終助詞を細かくは分類しない。

５）　高橋ゼミ（2009）

６）　間（2006）では、「若年層以外ではほとんど認められない」と記述しているが、私が本学に赴任してきた1999年の時点で当時20歳の学生（現在30歳）が違和感なく使用していたことを考えると、もっと上の世代から使い始められている可能性があると思われる。どのあたりの年代の人からヘンを使用しているかという調査も今後必要であろう。田文（2007）では、「「へん」の発生に関しては、1970年代頃が当てはまり、「へん」使用の拡大に関しては、1990年代の始め頃が当てはまる」と指摘している。

７）　回答項目に関しては、アンケートに協力いただいた教員の方より、「「使うが、よく使うわけではない」場合はどの回答項目を選ぶのか」のようなコメントをいただいた。この点については、考慮が必要であったと反省している。

ちなみに、上記のような場合は②として処理した。

８）　「鳥取県　高等学校課」(http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=93214)（2009/11/04アクセス）

９）　「島根県安来市行政サイト　イエローバス情報」(http://www.city.yasugi.shimane.jp/p/1/15/)（2009/11/04アクセス）

10）　都染（2005）では、一つの可能性を示しているにとどめており、雲伯方言域内のダの用法や廣戸（1949）の引用などを行い慎重な態度は崩していない。

11）　我々が行ったアンケートの【４】「開いとらんへん」【８】「開いとらんせん」に対しては、島根県出雲市出身の40代男性教員より、「開いとらへん」「開いとらせん」なら使うとの回答をいただいた。使用意識としても「開いとらん」

と意味は変わらないそうだ。

参考文献

今石元久（2004）『鳥取の伝統方言』日本文教出版
井上史雄・鑓水兼貴（2002）『辞典〈新しい日本語〉』東洋書林
上野智子（2005）「新しい方言・古い方言」上野智子・定延利之・佐藤和之・野田春美 編『ケーススタディー　日本語のバラエティ』おうふう，pp.54-59.
加藤義成（1935）「中央出雲方言語法考」『方言』5-4（井上史雄・篠崎晃一・大西拓一郎偏『日本列島方言叢書⑲　中国方言考②　鳥取県・島根県』ゆまに書房，1997年，pp.145-182．再録）
神部宏泰（1998[2]）「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学８　中国・四国地方の方言』国書刊行会，pp.211-238.
高橋ゼミ（2009）『雲伯方言内における文末詞「へん」の使用の分布について：高校生へのアンケートを中心に』（島根県立大学短期大学部松江キャンパス総合文化学科高橋ゼミ2008年度卒業プロジェクト研究：朝倉彩夏・伊藤沙季・上野智賀・長谷川なつみ・宮崎郁美）
田文優華（2006）「鳥取県西部の新方言「へん」」『山陰中央新報』（2009/8/29：文化欄11面）
田文優華（2007）「鳥取県西部における新方言「へん」についての研究：発生と使用拡大の要因を探る」『山陰民族研究』12，pp.24-37.
都染直也（2005）「山陰地方における新しい方言形「～(ダ)ヘン」「～ガン」「～ダンカ」について－JR山陰本線松江-和田山間グロットグラムをもとに－」『甲南大学紀要 文学編』138，pp.1-20.
友定賢治（2008）『日本のことばシリーズ32　島根県のことば』明治書院
日本放送協会編（1981）『全国方言資料　第５巻中国・四国編』日本放送出版協会
間健介（2006）「島根・鳥取県境周辺に見られる新方言「～へん」」『高知大国文』37（高知大学国語国文会），pp.(11)-(37).
廣戸惇（1949）『山陰方言の語法』島根新聞社（入手できず未見）
室山敏昭（1998[2]）「鳥取県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学８　中国・四国地方の方言』国書刊行会，pp.175-209.
――――（1998）『日本のことばシリーズ31　鳥取県のことば』明治書院

(平成21年12月3日受理)